

序

橋本栄莉

1. 若者の身体

身体は人類にとって最初で最後の資源である。私たちは個人は身体なくしては存在しえない。しかしその身体は、常にさまざまな他者——時の権力や病原体、超自然的な力——に侵害され続ける、共同的存在でもある。人類の身体の歴史は、多種多様な権力主体の期待や欲望との駆け引きや交渉の歴史であった。身体の構築において、各社会が有する文化装置が包摂し統御の対象としてきたものの一つが、子どもあるいは若者の身体である。彼ら・彼女らの身体は、人間集団にとって常に魅力的なものであり、介入と矯正の対象であり続けてきた。

ローカル社会において、子どもあるいは若者の身体は、成人儀礼や年齢組体系といった文化装置を通じて共同

体が定義するところの「大人」や「人間」の身体へと転換され、社会の構成メンバーとして承認されてきた「ミード一九八九、ファン・ヘネツプ二〇一二、ターナー二〇二〇」。工業化社会の成立以降、民族集団や性別、職業といったローカルな社会が求めてきた身体の鑄型から人々を解放すべきであるという声が高まっている「野村一九九九、一七頁」。通過儀礼に変わり登場したのは、国家の管理下にある学校、兵営、スポーツ施設、近代医療であり、またジェンダーやセクシュアリティにかんする国際ワークショップなどで提示される「望ましい身体」とその理解の方法であった。特定の権力主体の管理システムの下では、国際基準とされる数値や身体技法の教授を通じて、時として過度に一般化・標準化された身体が所与のものとして語られる。つまり、通過儀礼という場面に限らず、工業

化以降の社会においても、若者たちの身体を舞台として社会にとって「望ましい身体」の形成が試みられている点については変わりない。若者の身体には、その地域時代における権力体系や社会関係が集積しているのである。

本特集号の目的は、現代アフリカに生きる若者の身体について、自らの身体をとらえようとする複数の文化装置や歴史的想像力と若者たちがどのように向き合っているのかを文化人類学的観点から検討することにある。

国際連合経済社会局人口部によれば、二〇一二年の時点でアフリカにおける一二歳〜二四歳までの人口はおよそ二億八六〇〇万人であり、二一〇〇年までには世界の若者人口の四割以上をアフリカの若者が占めることになるという [United Nation, Department of Economic and Social Affairs, Population Division 2012, p. 3]。人口の大部分を若者世代が占めるサハラ以南のアフリカ社会において、若者をめぐって生起する現象は、国家の行方を左右する問題として語られてきた。

一九五〇年代以降にアフリカ各地で多発した内戦において、軍隊やゲリラの構成員の大部分を占める若者や「子ども兵」は統御不能な破壊分子とされ、戦後社会においては一転して社会の犠牲者、消極的な対象としての側面が強調されてきたことが指摘されてきた [Frederiksen and

Munive 2010, pp. 249-250, Boothy and Knudson 2000, Honwana 2006]。加えて、アフリカの国々は一九八〇年代から九〇年代にかけての経済危機からいまだ抜け出せずにいる。就職難や教育機会の不平等を経験した若者たちのなかには、ドラッグ使用や売買、人身売買といった犯罪的行為に手を染める者も多い [Sommers 2010, pp. 317-327]。国家や国際社会はアフリカの社会問題の中心として若者たちをとらえ、国連機関をはじめとする各種団体による若者たちを対象としたプロジェクトやワークショップがアフリカ各地で開催されている [Frederiksen and Munive 2010, pp. 249-250]。

このようなネガティブなアフリカの若者像に対し、二〇〇〇年代以降の文化人類学的若者研究では、年齢や世代という固定的・普遍的な区分から脱却し、社会を編成する歴史的エージェントとして「若者」(youth, young people) を捉え直す動きがある [e.g. Cole and Durham (eds.) 2008, Christiansen, Utas and Vigh (eds.) 2006; De Boeck and Honwana (eds.) 2005; Durham 2000; Durham 2004]。この考え方は西洋近代以降の構築物である若者像と、ローカル社会が前提としてきた世代観念を同時に生きる若者の現実を反映させ、関係的かつ構成的なものとして若者という概念を相対化する動きでもあ

る。

若者という概念や集合体は、関係や文脈によって特定の意味を与えられ、またその語が使用されることによって文脈や関係自体を作り出す指示的・関係的アクターである〔橋本二〇一八、三頁、Durham 2000, p. 116〕。本特集号においても、若者という語は、年齢に基づく集合体というよりも、グローバル、ナショナルな現象を問題化し、その動きと連動するローカル社会の多様性を捉えるために使用される。これは、西洋近代社会が所与とする若者概念のうちにはなく、むしろ様々な社会が前提とする世代概念の緊張関係のなかにある人々の姿を捉え、地域を越えて同時代に生きる若者たちの生の比較可能性を提示するための試みでもある。

国家や国際機関による社会の問題因子としての若者や、社会の犠牲者・加害者、あるいは未来への希望としての若者といった語り口はどれも、若者をターゲット化し、介入を正当化し、促す効果を持つ。しかし若者たちからの応答は、必ずしも国家や国際社会が期待する形で現れるというわけではない。さまざまな身体Ⅱ秩序と人間の「あるべき姿」へのまなざしが交錯するなかで、当の若者自身はどのように自らの身体を捉え、向き合っているのだろうか。各

論考は、彼ら・彼女らの身体の在り方を問題視するのではなく、またただその可能性を賛美するものでもない。本特集では、複数の権力や文化装置の網の目にある若者の身体が、彼ら・彼女らによってどのように解釈され、操作されているのか、またその身体が抱える未来とどのように人々が交渉しているのかを、具体的な経験を取り上げながら考察する。

2. アフリカにおけるライフコースと世代概念の混濁

アフリカ社会の世代について論じる際の大前提となるのは、世代カテゴリーと世代に対する認識の多様性である。多くのアフリカ社会において、子ども／大人という区分は存在する。しかしそれは実際の年齢によってではなく、例えば成人儀礼の経験や、土地や家畜の所有・相続、結婚、出産経験の有無などによって区別されてきた。親族のシテムや出自の考え方により、年若の者が年長者よりも「年上」と位置づけられることは珍しいことではない。成人儀礼を受けていない者が、いかなる年齢であれ「子ども」とみなされ、そのように扱われるという現象は当たり前のように存在する [e.g. Schloss 1988; 花瀬 二〇一六]。

古典的なアフリカの地域研究において、若者や子どもは

問題関心の対象とはなつてこなかった。長老のように「伝統的・専門的知識」を持たず、社会秩序の構成において決定権を持つことが少ない若者たちは、文化の総体を理解するための補助的な存在としてしか認められなかった。加えて、世代カテゴリーや定義が社会によって異なっていることも、特定の集合体として比較の観点から対象を論じることを困難にさせた。

子どもや若者を含むライフコース研究の端緒となったのが、アフリカの年齢組体系についての研究や、通過儀礼、親族のシステムを対象とした研究群 [e.g. Evans-Pritchard 1940; Fortes 1984, Spensor 1965; ターナー 二〇二〇] である。ローカル社会におけるライフコースの変遷のプロセスからは、その社会が前提とする人間像や人生を彩る時空間のありようが描かれ、西欧社会が前提としてきた、年齢に基づく単線的で一律的な世代概念は相対化された [橋本 二〇一八、四一五頁]。

しかし、西欧社会との接触とその後の社会変動の中で、これらのローカル社会の文化装置やライフコースをめぐる考え方も変化を遂げる。一九世紀後半から二〇世紀にかけての植民地支配や国家の独立、その後の新植民地主義的状况の中、アフリカには西欧由来の世代概念やライフスタイルについての考え方がもたらされた^②。

さらに、内戦に伴う強制移動や経済危機は、ローカルな世代概念や「大人」の条件、ライフコースの在り方にも変化をもたらした。これらの危機は、婚資不足や土地不足を引き起こし、「大人」になるための条件を満たすことができないう若者世代が増加している。紛争による地域社会の破壊により儀礼的職能者や伝統的知識は失われることとなり、通過儀礼を行うのが困難となる地域もある。通過儀礼や、結婚・出産・土地や家畜の相続という、地域的な意味において「大人になる」ための方法や媒体を失った若者たちは、「子ども」以上「大人」未満とも表現できる時期を長く過^③ごやがるを得ないようになった [橋本 二〇一八、一二頁]。

若者たちの窮状を受け、国連のガイドラインや「子どもの権利条約」を前提とし、子どもや若者の救済やケアとかわる様々なプロジェクト、プログラムがアフリカ各国で行われるようになった。この流れの中で、子どもから大人への発達を前提とした単線的な人生の在り方や、庇護されるべき対象としての子ども・若者観が、より「自然化されたライフコース」 [Cole and Durham 2008, p. 7]^③としてアフリカに導入されることになる。

3. 「あるべき身体」をめぐる摩擦と新たな実践

ライフコースの「自然化」は、おのずとその中で変化する人間の身体自体の「自然化」、つまり特定の世代によって「あるべき身体」を想定する思考の動きを生み出す。近年では、各地域や社会集団で想定される「あるべき身体」のあいだに摩擦が生じている。身体の「自然化」は、西欧近代社会のみが行ってきたことではない。身体変工を伴うローカル社会の通過儀礼は、まさしく人間としての「あるべき身体」を特定の文化装置によって作り出す目的のために行われてきた。通過儀礼における身体加工は、あいまいで「不完全」な状態にあるとされる身体を、社会が定義するところの「大人」あるいは「人間」の身体へと「整える」作業である。

現代世界における身体変工に対する肯定・否定の態度は、子どもや若者という境界的存在に対し、それぞれの方法で身体の「自然化」を行うことに対する態度を示すものである。具体的な例を取り上げよう。FGM/C (Female Genital Mutilation/Cutting、女性器切除) 廃絶運動をめぐって生起する問題は、西欧近代社会が想定する「あるべき身体」とローカル社会のそれとが競合していることを示している。

FGM/Cはアフリカを中心として長らく行われてきた慣習とされており、一九七〇年代以降、国際的な廃絶運動が行われている。FGM/Cは、その施術法によりI〜IVのタイプに分類される³⁾。FGM/C廃絶運動の中で、あらゆるスタイルや方法での施術、いかなる軽微な施術も許さないとする「ゼロ・トレランス」が掲げられているが、これについては議論の余地があることが指摘されている[宮脇ほか編 二〇二一]。

このFGM/C廃絶運動あるいは「ゼロ・トレランス」の追求は、一方でFGM/Cを望まない人々の救済につながっているが、他方で、施術の地下化や児童婚の増加など地域社会に新たな困難や問題をもたらしているという[中村二〇二一a]。つまり、身体変工の禁止は、既存の秩序から人々を解放するものでありつつも、その一方で新たな身体II秩序の領域へと人々を追いやり、それについてゆけない社会に新たななみずみをもたらしている。関連して、男性の割礼や先進国を中心に行われている女性器の整形手術は容認するといったようなダブル・スタンダードについても目を向けるべきとの指摘がある[宮脇 二〇二一]。こうした状況からは、身体変工を肯定するにせよ否定するにせよ、主張の前提となるはずの人間または若者にとって「あるべき身体」とはどのようなものであるか、その身体を所

有しているのは誰なのかということについて議論や合意が十分でないままにプロジェクトだけが進行していることがうかがえる。

しかし、介入者たちの抱える矛盾や思惑をよそに、施術を受ける当の女性たちのあいだでは、諸勢力の様々な想像力の中で自身の身体についての新たな実践とアイデンティティが生み出されている。FGM/Cの慣行を有するケニアの牧畜民サンプルでフィールドワークを行ってきた中村は、二〇〇六年以降に社会で生まれた施術の新たな「スタイル」と、それに伴って変動する女性たちのアイデンティティを紹介している[中村 二〇二一b]。

サンプル社会の女性たちは、結婚式の際に行われる割礼を経て新たに「生まれ変わり」、出産や子育ての待つ既婚という次の人生のステージへと移行する。サンプルでは、クリトリスと小陰唇の切除、WHOが規定するタイプIIが主流であり、社会変容の中にあっても結婚に伴う割礼が強く維持されているという[中村 二〇二一]。

ケニアでは二〇〇一年以降、一八歳以下の女子に対する割礼が禁止され、FGM/C廃絶を目指す取り組みが活発化した。二〇一一年には「FGM禁止法」が制定され、本人を含む施術に関係した者に罰金や禁固、あるいはその両方の厳罰を科すようになった。サンプルにおいてもFGM/C

の隠蔽化・地下化が進んだ[中村 二〇二一b、一〇七頁]。しかし、この状況なかで、割礼自体がなくなることはなかった。廃絶運動の脅威は、施術方法のイノベーションと多様化を生み出したのだった。

サンプルでは、「カテイカテイ」と「スナ」という新しい施術方法が誕生した。「カテイカテイ」は、クリトリスをすべて切除せずに半分だけ切除し、小陰唇は従来通りすべて切除するものであり、「スナ」はクリトリスの包皮のみを切除する。サンプルの人々は、例えば「伝統的」な暮らしを営む低地に暮らす者なら従来の割礼、学校教育を受ける者であるなら「カテイカテイ」、キリスト教徒であるなら「スナ」といったように、施術の「スタイル」を検討し、他者の選択を評価する[中村 二〇二一b、一〇九―一三頁]。

サンプルの女性たちは、教育を受ける／受けない、高地人／低地人、タウンに暮らす者／牧畜集落の者、そしてこれらの二分法の複雑な組み合わせに基づき、自身のアイデンティティにそって自身の「スタイル」を選択している。中村は、こうした彼女たちの選択や態度は絶対的なものではなく、他者の選択に対する敬意や変化に対する柔軟な姿勢も観察されたことも報告している[中村 二〇二一b、一三頁、一一七―一一八頁]。ここで選択される「スタ

イル」とは、彼女たちの生きる場所や生き方の柔軟で寛容な「スタイル」でもある。彼女たちの身体は、目の前の人間関係やライフプランを表すものであると同時に、世界規模で展開する身体の標準化の要請に対する応答であり、この動きの背景にある重層的な社会秩序とのコミュニケーションの形式でもある。

当事者の視点から現象を描き出すという文化人類学的手法は、特定の年齢集団に対するラベルのもとにある加害者／被害者や、社会の問題因子／未来への希望といった単純な想定にもとづく若者の理解を否定する。Maira の Soep は、アパデュライのスケープ論 [Appadurai 1996] に着意を得、ユース・スケープ (youthscape) という概念を提唱した。ユース・スケープは、単に世代を示す語ではなく、ナショナル・イデオロギーや、ローカルなコンテクストの諸関係を問うための概念的視点であり、方法的アプローチである。ユース・スケープはまた、特定の地理的場所や一時的なものではなく、社会的・政治的権力や物質性への問いが密接に関係する場である [Maira and Soep 2004, pp. xv-xiii]。この観点は、単に当事者の心情に寄り添うものでなく、複数の論理のなかで「社会問題」としての若者が作り上げられ、処理される中で、それらが「解決」されぬまま進行したり、新たな困難を生み出したりする場面

を若者自身の視点から浮き彫りにする。本特集号が目にするのも、複数の身体的規範をめぐる「正統」と「逸脱」のはざまで、グローバル、ナショナル、ローカルな社会が想定する「あるべき身体」のあいだを行き来しつつ、若者たちが自分なりの「正統」のありかたを見出しつつ過程と、その創造の力である。

4. 儀礼的時空間を通過する身体と創造の力

この創造の力を検討するにあたり参考になるのは、古典的な通過儀礼研究において指摘されてきた境界性(リミナリティ)が抱える特性である。前述の通り、通過儀礼が形骸化あるいは消失しつつある中でも、新たに登場した通過儀礼的文化装置や時空間が生み出す秩序についてもこの特徴は当てはまる。通過儀礼研究において子どもや若者の身体は社会が抱える境界性の領域に属するものとして論じられ、儀礼とその境界性が有する社会秩序の形成の力と技法が明らかにされてきた [e.g. ファン・ヘネップ 二〇一三、ターナー 二〇二〇]。その特性として強調されるのは、境界上の時空間やその中にいる人間の持つ脆弱さや受動性、参加者が社会を客観的に捉える再帰的性格、そして社会秩序の再生産の力である。

通過儀礼のプロセスには、在来の神や精霊といった超人間的力からの承認と、祖先やこれから生まれる子孫といった現前しない者たちを含む共同体による承認が含まれる。儀礼を通じて、彼ら・彼女らの身体は、社会の秩序と様式へと加入する。儀礼の場において表出するのは、理想の秩序あるいはその転倒であり、既存の秩序や身体を「自然化」する力である。ここでいう「自然化」とは、儀礼において構築される身体が「自然」な人間の姿であると社会の成員に承認させる力のことである。

ファン・ヘネップが「境界の段階」(the liminal phase)と呼んだ通過儀礼のさなかにある人間の状態について、ターナーは次の性質を付け加えた。

：「引用者補足・境界にある人間の」あり方やこの人たちは、平常ならば状態や地位を文化的空間に設定する分類の網の目から抜け出したり、あるいは、そこからはみ出しているからだ。境界にある人たちはこちらにもいないしそちらにもいない。かれらは法や伝統や慣習や儀礼によって指定され配列された地位のあいだのどっちつかずのところにいる。(中略)リミナリティは、しばしば、死や子宮の中にいること、不可視なもの、暗黒、男女両性の具有、そして日月の蝕に喩

えられる(中略)その行動は、通常、受動的であり謙虚である。(中略)かれらは、あたかも、新しく形作られるためのおなじ条件に変えられすり減らされるかのようであり、また人生の新しい情況に自分を適應させる新しい力を授けられるかのようである「ターナー二〇二〇・一五一―一五二頁、強調点はターナーによる」。

受動性、謙虚さ、そして「死」に近い状態といった境界性が有する特徴は、儀礼において人工的に構成され、時として過剰に演出される。秩序の再生産のプロセスからは、必ずしも以前とまったく同様の秩序が生み出されるわけではない。同じ秩序の反復・再生の試みであったとしても、その舞台の演者や文脈は日々変化する。ターナーが指摘するように、境界上の時空間には、自身を新しい状況に適應させるための、創造的な力が備わっている。

通過儀礼が現代社会において消失または形骸化したからと言って、儀礼のなかで強調されてきた子どもや若者たちの特性までもが消失したわけではない。例えば教育機関や軍事施設、国際ワークショップ、スポーツ訓練場といった若者をターゲットとし「あるべき身体」を創り出す人工的な場にもこれらの特徴は当てはまる。社会から切り離さ

れたこのような場では、独自のコミュニケーションや構成、人間関係が発達し、その中では「儀礼的秩序」、「儀礼的规则」とでもいうべきものが生まれる「ゴッフマン二〇一八・ターナー 一九八一」。

様々な「儀礼」の場において、子どもや若者たちは、その身体の一部をひとたび社会に預ける。預けられた身体には、祖霊からナシヨナル・イデオロギー、そして「グローバル・スタンダード」といった規範などの様々な「力」が介入する。この中で、彼ら・彼女らは、自身の身体が自己の管理から離れる感覚や、予期せぬ力の侵入、それらの力を「自分のもの」として受け入れることを経験する。身体が自己のものであると同時に他者のものであるというずれの経験、つまり身体の断片化とその後の再統合のプロセスにおいて、彼ら・彼女らは、自己の身体が持つ複数の意味を見つめ、客体化する。若者自身の解釈から見えてくるのは、個人個人の身体であると同時にローカル、ナシヨナル、グローバルまでの様々な想像力が集結する場としての「多中心性」[Comaroff and Comaroff 2006]な身体である。

5. 特集号の構成

本特集では、若者の身体と直接かかわりながら特定の社

史苑(第八二巻第一号)

会空間を作り上げる人やモノ、場所や諸存在物の関係のなかで、若者たちが自らの身体を客体化・対象化し、働きかけるプロセスがそれぞれの事例から描かれる。各論で取り上げられる南スーダン、ベナン、ケニアの国家的な状況は異なり、若者の定義や対象範囲はそれぞれのフィールドにゆだねられているが、若者たちの身体の内経験には共通の背景が存在する。急激な都市化と社会変化を経験したポスト植民地期のアフリカ社会において、村落社会からグローバルなサイバー空間まで、様々な社会秩序が想定するところの若者観や若者の身体に対する期待は複雑に絡み合いながら人々の生を形づくっている。

本特集は、三本の論考からなる。

橋本論文では、南スーダン共和国の紛争後社会における成人男性の癍痕をめぐって生起する「男らしさ」についての言説やジレンマが取り上げられる。ナイル系農牧民であるヌエルの成人儀礼において男性の額に刻まれる癍痕は、「男児」と「成人男性」を隔てる境界であった。しかし、植民地時代以降の政治情勢において、癍痕は、実際の機能や意味とは離れて、特定の民族集団出身者のシンボルとして認識されるようになった。近年は癍痕の施術は行われなくなり、現在は癍痕を持つ男性と持たない男性が共存している。二〇一三年末以降、彼らは民族対立を経験し

たが、ウガンダに逃れたヌエルの男性たちは、村落社会が期待する秩序と都市的な生活、そして先の紛争経験といった様々な規範や出来事を参照しながら、「本物の男」とはといった何であるかについての議論を重ね、癩痕を持つ／持たない自己の身体とともに生きる道のありかたを模索している。

村津論文では、ベナン共和国のデリヴァランス・ミサ、つまり「悪霊」から解放されるための儀礼に登場する若い女性たちの身体が取り上げられる。彼女たちの身体に憑依するのは、商業的成功や性的奔放さのイメージを伴う精霊マミワタである。彼女たちの語る憑依の経験からは、ベナン南部の女性たちを捉えようとする社会的義務や圧力、そして「近代」風のライフスタイルとのあいだのジレンマがうかがえる。身体を通してマミワタとの対話や交渉、あるいはデリヴァランス・ミサでの身体の所作を通じて、「逸脱」とみなされた彼女たちの身体は客体化され、「正統」なものへの回帰が公の場で承認される。このプロセスからは、身体と社会、環境、そして霊的存在との創造的関係を紡ぎながら、自身の生のありかたを位置づけようとする女性たちとその周辺の人々の姿がうかがえる。

萩原論文では、ケニア共和国における自転車競技選手たちのコミュニケーションを形成してゆく身体のありかたが検討さ

れる。アフリカにおけるスポーツは、先進国や国家から否応なしに開発やエンパワーメントの対象としてのまなざしを注がれる。萩原が着目するのは、従来の研究で取り上げられてきた、一体感や高揚感、可傷性として解釈可能な身体感覚ではなく、そこからこぼれ落ちる「どうしようもない身体」である。若い選手たちは、選手間の収入格差や生計のための副業への従事という葛藤や苦勞を超えて、ただただ疲れる、ただただ痛むといった「どうしようもない身体」をたがいに感知することで結びついていた。スポーツ選手に求められる規律化された身体からの「逸脱」とみなされるこうした身体の側面は、しかしながら、様々なまなざしを注がれる選手たちが、未来へのヴィジョンと暮らしを共有していくうえで不可欠なものでもあった。

各論考の描写から見えてくるのは、複数の社会秩序から／への欲望や力の受難者としての自己イメージを引き受けつつも、それらを組み替え、コラーージュしながら自身の「秩序」を見出してゆく人々の実践である。彼ら・彼女らは、多様な実践、話法、解釈、そして身体感覚を通じて個別の状況を切り抜けようとする。自身をとりまく様々な権力やライフスタイルとの対話や交渉過程、その中で育まれるヴィジョンやミクロな実践は、それ自体一つの歴史であり、新たな社会秩序の萌芽でもある。それぞれの国家が抱える

ナショナル・イデオロギーや国際社会がもたらす「グローバル・スタンダード」、「自然化されたライフコース」の影響がアフリカの新たな問題を生んでいる今日において、一時的・対処療法的にも見える彼ら・彼女らの知や実践は、問題の根底に横たわる、個人的なものであると同時に集合的・政治的である人間の身体の「自然」をめぐる問いを拓くものである。

【謝辞】

本特集号は二〇二〇年一〇月三日にオンラインで開催された立教大学史学会のシンポジウム「アフリカの若者の身体」における研究報告がもととなっている。シンポジウムでは四名による研究報告に加え、二名のコメンテーターおよびシンポジウム参加者とともに議論を行った。本特集号の各論文は、シンポジウムでの研究報告と最後の議論を踏まえて執筆された。数々の論点を指摘してくださったコメンテーターの梅原秀元氏（立教大学）、岡崎彰氏（東京外国語大学）、そしてシンポジウム参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献一覧

- ゴッフマン、アーヴィング〔浅野敏夫訳〕
二〇一八 『儀礼としての相互行為』 法政大学出版社。
ターナー、ヴィクター〔梶原景昭訳〕
一九八一 『象徴と社会』 紀伊國屋書店。
ターナー、ヴィクター〔富倉光雄訳〕
二〇二〇 『儀礼の過程』 ちくま学芸文庫。

中村香子

- 二〇一一 『ケニア・サンプル社会における年齢体系の変容動態に関する研究——青年期にみられる集団性とその個人化に注目して』 松香堂書店。

中村香子

- 二〇二一 a 『グローバル・ディスコースとアフリカの女性器切除』 宮脇幸生ほか編『グローバル・ディスコースと女性の身体——アフリカの女性器切除とローカル社会の多様性』 所収、一—一二頁。
- 二〇二一 b 『女子割礼／女性器切除』をめぐる多様性と柔軟性のエスノグラフィ― 宮脇幸生ほか編『グローバル・ディスコースと女性の身体——アフリカの女性器切除とローカル社

会の多様性』所収、九七―一二〇頁。

野村雅一

一九九九 「技術としての身体——20世紀の研究史から」野村雅一・市川雅編『技術としての身体』所収、八二―二〇頁。

橋本栄莉

二〇一八 「複数の像を生きる若者たち——アフリカの「若者」研究の動向と新たな研究の視座——」『スワヒリ&アフリカ研究』二九号、一―一七頁。

花淵馨也

二〇一六 「老いてなお子ども：コモロ諸島・ンガジシヤ島における年齢と階梯」田川玄・慶田勝彦・花淵馨也編『アフリカの老人』所収、一五九―一八六頁。

ファン・ヘネツプ、アーノルド〔綾部恒雄・綾部裕子訳〕

二〇二二 『通過儀礼』岩波文庫。

ミード、マーガレット〔畑中幸子・山本真鳥訳〕

一九八九 『サモアの思春期』蒼樹書房。

宮脇幸生・戸田真紀子・中村香子・宮地歌織編

二〇二二 『グローバル・ディスコースと女性の身体——アフリカの女性器切除とローカル社会の多

宮脇幸生

様性』晃洋書房。

二〇二二

「女性器切除は女性の身体・心理にいかなる影響を与えるのか？」宮脇幸生ほか編『グローバル・ディスコースと女性の身体——アフリカの女性器切除とローカル社会の多様性』所収、一三一―一九頁。

African Union

2006

African Youth Charter

[https://au.int/sites/default/files/treaties/7789-treaty-0033_-_african_youth_charter_e.pdf]二〇二一年一月一日最終閲覧。

Appadurai, Arjun

1996

Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization, Minneapolis, University of Minnesota Press.

Boothby, Neil G., and Knudsen, Christine M.

2000

“Children of the Gun”, *Scientific American* 282(6), pp.60-65.

- Christiansen, Catrine, Utas, Mat and Henrik Vigh, E. (eds.)
- 2006 *Navigating Youth Generating Adulthood: Social Becoming in an African Context*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Cole, Jennifer and Durham, Deborah (eds.)
- 2008 *Figuring the Future: Globalization and the Temporalities of Children and Youth*, Santa Fe, NM, School for Advanced Research Press.
- Comaroff, Jean and Comaroff, John
- 2006 Reflections on Youth, from the Past to the Postcolony, in Fisher, M. and G. Downey (eds.), *Frontiers of Capital: Ethnographic Reflections on the New Economy*, pp.267-281, Durham, Duke University Press.
- De Boeck, Filip and Honwana, Alcinda (eds.)
- 2005 *Makers and Breakers: Children and Youth in Postcolonial Africa*. Trenton, Africa World Press.
- Durham, Deborah
- 2000 "Youth and the Social Imagination in Africa: Introduction to Parts 1 and 2", *Anthropological Quarterly*, 73(3), pp.113-120.
- Durham, Deborah
- 2004 "Disappearing Youth: Youth as a Social Shifter in Botswana", *American Ethnologist*, 31(4), pp.589-605.
- Evans-Pritchard, Edward E.
- 1940 *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*, Oxford, Clarendon Press.
- Fortes, Meyer
- 1984 Age, Generation, and Social Structure, in Kerzer, I. and Jennie Keith (eds.), *Age and Anthropological Theory*, pp. 99-122, Ithaca, NY, Cornell University Press.
- Frederiksen, Bodil and Munive, Jairo
- 2010 "Young men and women in Africa: Conflicts, Enterprise and Aspiration", *Young* 18(3), pp. 249-258
- Honwana, Alcinda

- 2006 *Child Soldiers in Africa*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Maira, Sunaina and Soep, Elisabeth
2004 *Youthscape: The Popular, The National, The Global*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- O'Brien, Cruise D.
1996 "A Lost Generation? Youth Identity and State Decay in West Africa", In R. Werbner (ed.) *Postcolonial Identities in Africa*, pp.55-74, London, Zed Books.
- Schloss, Marc
1988 *The Hutchet's Blood: Separation, Power, and Gender in Ething Social Life*, Tuscon, University of Arizona Press.
- Sommers, Marc
2010 "Urban Youth in Africa", *Environment and Urbanization* 22(2), pp. 317-332.
- Spencer, Paul
1965 *The Samburu: A Study of Gerontocracy*, Abingdon, Routledge.
- United Nations
2013 Definition of Youth.
[<http://www.un.org/esa/socdev/documents/youth/factsheets/youth-definition.pdf>]
110111年11月1日最終閲覧。
- United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division
2012 World Population Monitoring Adolescents and Youth--A Concise Report[https://www.un.org/development/desa/pd/sites/www.un.org/development/desa/pd/files/documents/2020/Feb/un_2012_worldpopulationmonitoring_concisereport.pdf]
110111年11月1日最終閲覧。

註

(1) 国際連合は若者概念の多様性を考慮したうえで一五歳から二四歳までを「若者」と定義しているが、同じ国連機関であっても、国際連合人間居住計画 [UN Habitat] の若者基金は、「若者」の定義を一五歳から三二歳までとしている [United Nations 2013]。アフリカ連合は一五歳から三五歳までを「若者」と規定する [African Union 2006]。

(2) ただし、後述する単線的なライフコースや年齢に沿った世代の理解も、必ずしも欧米社会の「伝統的」な世代概念というわけではない。一九世紀以降の西欧社会において生産消費とかかわる組織や女性の政治的地位の変化、児童労働の取り締まりといった社会情勢の中で、それまでの子ども期や青年期に対する捉え方が変化したとされ、アフリカに到来した若者概念もこの流れを汲むものであると考えられる [Cole and Durham 2008, p. 6]。

(3) ただし、この単線的ライフコースもまた静態的なものであり続けることはできなかった。二〇世紀以降の西欧社会においても、大人／若者／子どもの世代区分を、年齢ではなくその人物の置かれた社会的・経済的状况によって決定する風潮が現れた。Cole と Durham は、「自然化されたライフコース」に対し、これを「ポストモダン・ライフコース」と呼んだ [Cole and Durham 2008, p. 7]。

(4) それぞれのタイプは以下の通りである。タイプⅠ・クリトリスの一部もしくは全体およびクリトリス包皮の切除、タイプⅡ・クリトリスの一部もしくは全体および小陰唇の切除、大陰唇の切除を伴うこともある、タイプⅢ・小陰唇および大陰唇の両方、あるいは小陰唇か大陰唇のみを切

除・接合することによって覆いがつくられ膣口を狭める、クリトリスの切除を伴うこともある、タイプⅣ・その他の医学的治療以外の目的で女性性を傷つける施術 [中村二〇二一a、二頁]。

(本学文学部准教授)

The Bodies of African Youth

HASHIMOTO, Eri

序
(橋本)

The history of human bodies has been a history of negotiation tactics, expectations, and desires among multiple authorities contesting in a given era. This special issue aims to examine the relational status of the bodies of youth in contemporary African societies by describing the process by which the youth deal with multiple powers, cultural devices, and imaginations, based on anthropological fieldwork data. Anthropological study on body modifications operated through the initiation of local communities has clarified the process by which societies transform people from “pre-human beings” into “real humans” with “appropriate” bodies. Such initiations can be found not only in local societies but also in post-industrial societies, in institutions such as schools, the military, medical centers, and international workshops that teach youth about “appropriate” bodies. The bodies of youth in the post-colonial and post-war contexts of Africa are recognized as actors that threaten societies with their aggressive, illegal, and immoral behaviors. At the same time, they are also described as having a positive potential to (re)construct their societies and lead to development. These narratives show the desires and expectations of the society to control and exploit the bodies of youth. The concept of “youth” cannot be defined through ages and generational categories but as a relational concept affected by local, national, and international contexts. This special issue contains three articles and one essay. Each study identifies the following themes: scarification of men’s bodies in the post-conflict society of South Sudan, possession of spirits on the bodies of young women in Benin, and collective bodies among young athletes in Kenya. In each study, we not only emphasize society’s recognition of the bodies of youth but also how the youth themselves talk about and interpret their bodies by referring to multiple powers and expectations from communities. In doing so, we elucidate the process of youth negotiation and articulation and their coping with several levels of orders and norms, raising a question on the “nature” of the human body.